六月辛酉朔癸亥。自高来県渡玉杵名邑。時殺其処之土蜘蛛津頬焉。丙子。到阿蘇国也。其国郊原曠遠。不見人居。天皇曰。是国有人乎。時有二神。曰阿蘇都彦。阿蘇都媛。忽化人以遊詣之曰。吾二人在。何無人耶。故号其国曰阿蘇。（後略）

2

景行天皇、玉名より阿蘇に向かう

日本書紀　巻七　十五冊の内

紙本印刷　冊子装
縦二五・一　横一八・一
成立／奈良時代　養老四年（七二〇）
版行／江戸時代後期　十九世紀
東京・公益財団法人永青文庫蔵　熊本大学附属図書館寄託

「日本書紀」は現存する最古の正史で、舎人親王を中心に奈良時代に編纂された。その中で、景行天皇の治世となって十八年目の六月に天皇が玉名を訪れたことが記されている。

これより先、天皇は南九州の熊襲平定を終えたところで、熊本に入ったのは都への帰還の途次だった。天皇はまず「熊県」（球磨地方）を征服し、次いで熊本を「火国」と呼ぶことになるエピソードを挟んだ後に、海路「玉杵名邑」に上陸する。そこには「土蜘蛛津頬」なる豪族がおり、天皇はこれを討って阿蘇に向かったという。

土蜘蛛とは特定の氏族名ではなく、天皇への恭順を表明しない土着の豪傑・豪族・蛮魁などに対する蔑称として用いられていた。景行天皇が実在の天皇であったかは定かでないが、「古事記」「日本書紀」においては、皇室による全国支配をこの天皇とその皇子日本武尊の時代のこととして編纂されている。（萬納）

菊池川の美しき水源

3　**菊池川水源図**　一幅

杉谷雪樵
絹本着色　掛幅装
縦一四八・〇　横八四・〇
明治時代中期　十九世紀
東京・公益財団法人永青文庫蔵

本作品は菊池渓谷付近を描いたもので、秋の紅葉の時期が主題とされている。

菊池渓谷は、菊池川の源流にあり、約千百九十三haの広大な面積からなる。身を切るような冷たい清流により、夏は避暑地として多くの観光客でにぎわう。この時期は、渓谷のなかに差し込んだ太陽が水煙を照らし、光芒と称される幻想的な情景が現れるのも特徴である。

本作品の作者の杉谷雪樵（一八二七～一八九五）は、幕末から明治時代中期の日本画家。雪舟流雪谷派の流れをくみ、矢野吉重を祖とする熊本藩お抱え絵師の一派、矢野派の画系に連なる。幕末から明治時代中期にかけて活躍し、熊本においては最後のお抱え絵師、近代日本画の先駆者とも評される。

別に保存されている下図によれば、雪樵は明治十七年（一八八四）に菊池方面に写生旅行に行ったという。したがって、そこからあまり間を空けない明治二十年頃に、写生で得た知見をもとに描いたと考えられている。（萬納）

方保田東原遺跡（山鹿市）

南海の貝をモチーフにした魔除けの道具

国指定重要文化財

8 巴形銅器（ともえがたどうき） 一点

山鹿市・方保田東原遺跡出土
銅製
径一二・〇 厚二・一
弥生時代後期 紀元後～三世紀頃
山鹿市教育委員会蔵

鏡の出土量では県内屈指

国指定重要文化財

9 小型仿製鏡（こがたぼうせいきょう） 一点

山鹿市・方保田東原遺跡出土
銅製
径八・一 縁厚〇・四
弥生時代後期 紀元後～三世紀頃
山鹿市教育委員会蔵

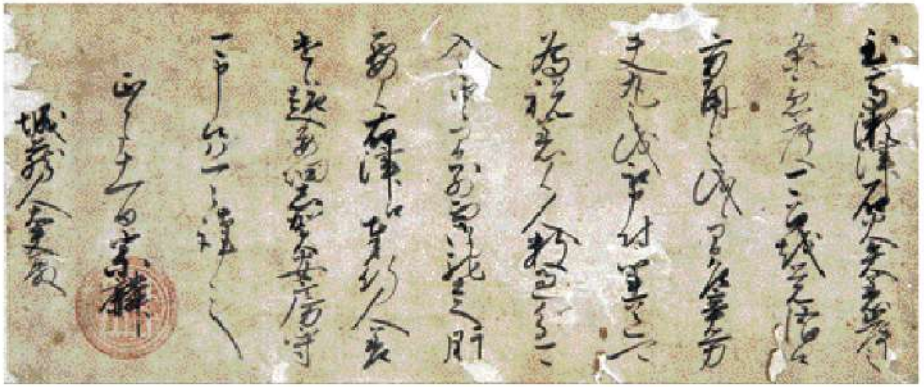
貿易でもたらされた「石火矢」、高瀬津に到着

25　大友宗麟書状（おおともそうりんしょじょう）　一通

城蔵人大夫宛
紙本墨書　切紙　掛幅装
縦一七・六　横四二・六
桃山時代（天正四年ヵ、一五七六カ）正月十一日付
大阪・南蛮文化館蔵

豊後（現大分県）を拠点とし、戦国時代には肥後（現熊本県）にも勢力を広げた大友宗麟が、肥後の城蔵人大夫に宛てた手紙。蔵人大夫の人物像はよくわからないが、かつて菊池氏の家老を務めた城一族のひとりであろう。文面の大意は、「高瀬津（現玉名市）に「石火矢」（大砲）が到着したので、（豊後まで）運ばせるつもりである。（城蔵人大夫が関与すべき）そちらの地域の事柄なので、ご苦労だが人足（の供出）を命じ、運送いただければありがたい。多くの人足が必要だろうから、しっかり馳走することが肝要だ」というもの。宗麟は「高瀬津」周辺に影響力を有する城氏に命じ、大砲を（恐らく陸路で）豊後へ運ばせようと考えていた。

かかる経緯で注目されるのは、南蛮貿易を通じて入手されたとおぼしき「石火矢」が、高瀬津に荷揚げされている事実であろう。菊池川河口に位置する高瀬津は、中世を通じて国内外の流通・貿易拠点として機能したが、桃山時代にかけては宣教師がたびたび訪れ、ヨーロッパの文物も往来する港湾都市となっていた。後に豊臣秀吉がこの地を直轄領とするのは、そうした繁栄に着目してのことである。（山田）



至高瀬津石火矢着岸之
条、急度可召越覚悟候、
方角之儀候間、乍辛労
夫丸之儀被申付、運送可
為祝着候、人数過分可
入之由候間、別而御馳走肝
要候、右津江奉行人差
遣候趣、委細志賀安房守
可申候、恐々謹言、
正月十一日　宗麟（朱印）
城蔵人大夫殿

高瀬から運ばれ、島津氏との戦いに用いられた大砲

26　フランキ砲（ほう）「国崩（くにくず）し」（複製）　一門

原品／青銅鋳造
口径九・七　全長二八七・五
原品／インド　十六世紀
東京・遊就館蔵
複製／玉名市立歴史博物館こころピア蔵

大友宗麟が天正四年（一五七六）にポルトガル人宣教師を通じて、インドから購入、輸入した大砲の複製。高瀬で陸揚げされ、その際自領の臼杵（現大分県臼杵市）まで運搬するための人足の提供を要求した文書がある（No.25）。

フランキ砲とは十六世紀に発明された大砲の一種。フランキはフランク人を意味し、十六世紀の日本においては特に東シナ海海上交易に入ってきたポルトガル人やスペイン人を指した。

砲尾上面が大きく開口しており、ここに砲弾と発射薬を詰めた単装式の弾倉を挿入する。あらかじめ弾倉を用意しておくことで速射が可能になる利点があった。しかし、工作精度上、弾倉装填時における密閉は完全とは言い難く、ガス漏れで威力は低く事故も多かった。もっとも宗麟は輸入したフランキ砲を居城・臼杵城に配備し、後に籠城して島津軍を迎え撃った際に使用。その巨大な砲弾と威力は敵を食い止めるのに大いに役立ったという。その威力から「国崩し」と称された。

後に大友氏が除国されても、江戸時代を通じて臼杵城本丸に配備されていたが、明治初頭の廃藩置県時に国へ献上され、現在一門が東京・遊就館に所蔵されている。（萬納）

竹崎季長、博多湾の戦場で菊池勢と出会う

38　蒙古襲来絵詞（大矢野家本）　下巻　二巻の内

伝福田太華模写
紙本着色　巻子装
下巻／縦三八・一　横一七八二・五
江戸時代後期　十九世紀
個人蔵　熊本県立美術館寄託

《蒙古襲来絵詞》は、文永・弘安の役、すなわちモンゴル襲来の後に、肥後の武士竹崎季長が合戦と訴訟の様子を描かせた絵巻物。江戸時代に複数の模本が制作されたが、本作品は、熊本藩の馬医にして絵師でもあった福田太華が模写したものとされる。

弘安の役（弘安四年、一二八一）を題材とした《蒙古襲来絵詞》の下巻には、鎌倉時代における菊池氏の動向を伝える貴重な情報が含まれている。石築地の上から季長一行を見守る菊池武房の軍勢を、長きに渡り描いた場面である。肥後の武士は博多湾の西方、「生の松原」（現福岡市西区）を担当していたから、描かれた舞台はそこの石築地であろう。この場面を説明する詞書には、「人々おほしといへとも、きくちの二郎たけふさ、文永の合戦になをあけし」とあり、菊池勢は文永の役（文永十一年、一二七四）で大きな戦功をあげていたという。たしかに、彼等の前を通過する季長一行よりはるかに大勢。武装も大鎧ばかりで、厳重である。菊池勢の中には名前が書かれた人物が三名おり、右から「赤星太郎」「菊池三郎有高」「菊池次郎武房」とされる。当主の武房は華麗な逆沢潟威の鎧を着用し、太刀の尻鞘（カバー）には、輸入品の虎の尾が用いられている。質素な季長一行とは対照的なコントラストとなっており、全体的に、菊池勢の武威と豊かさが強調される描きぶりである。（山田）

北条一門との親密さを示す一通

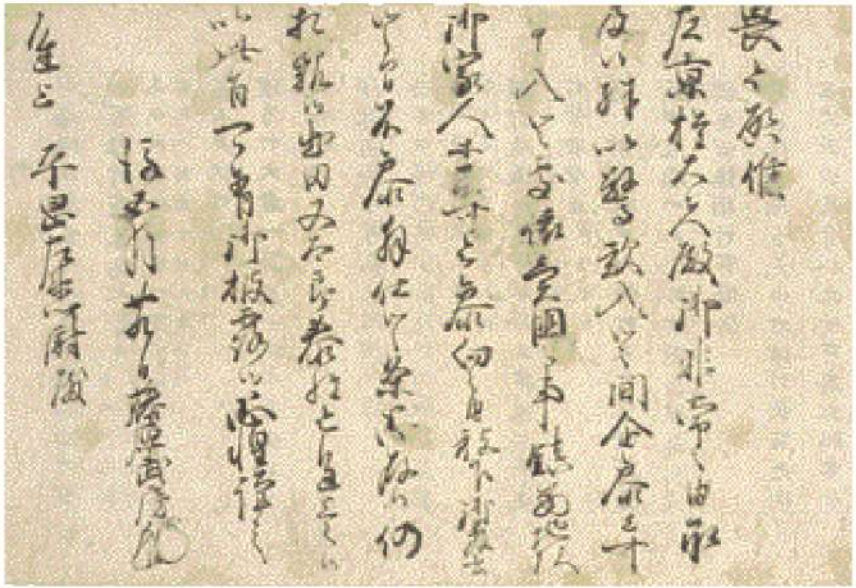
国指定重要文化財

39　菊池武房書状　一通

紙本墨書　竪紙　巻子装
紙背は「斉民要術　巻十　中」
縦二八・五　横五一・六
鎌倉時代　文永十年（一二七三）閏五月二十九日付
愛知・名古屋市蓬左文庫蔵

『斉民要術』は六世紀中国の賈思が記した農書。文人としても著名な北条一門の金沢実時は、これを不要となった文書群を裏返し製本したものに書写した。本書状はその文書群のうちの一通で、菊池武房発給文書としては現存唯一のものである。北条一門の重鎮で連署の北条政村が亡くなったのを知り、異国警固番役で動けない自身の代わりに知人・出田泰経を弔問に向かわせる旨を、政村の舅でもある実時に彼の家臣・平岡左衛門尉をとおして伝えている。鎌倉後半における菊池氏と幕閣との親しい関係を窺わせる貴重な史料で、〔No.44〕とともに菊池氏が鎌倉幕府に抑圧されていたという通念に再検討を迫る材料である。出田氏は早くに菊池氏から分かれた武家で、広い意味では菊池氏の同族だが、この頃には菊池氏当主の統率を受けない独立した家となって久しかったようだ。

なお、実時が創始した金沢文庫の蔵書の多くは、後に徳川家康が入手し、尾張藩祖の徳川義直に譲られ伝わった。（小川）



長令啓候、
左京権大夫殿御非常之由、承
及候、殊以驚歎入候之間、企参上、可
申入候之処、依異国之事、鎮西地頭
御家人等、不可令参向之由、被下御教書
候之間、不参拝仕候之条、恐存候、仍
相親候出田又太郎泰経令進上之候、
以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
後五月廿九日　藤原武房（花押）
進上　平岡左衛門尉殿

建武政権を離反し、室町幕府をたてた尊氏のすがた

国指定重要文化財

52 **木造足利尊氏坐像** 一躯

ヒノキ材　寄木造　玉眼　彩色
像高九四・五
南北朝時代　十四世紀
大分・安国寺蔵

室町幕府初代将軍・足利尊氏の等身、束帯姿の肖像彫刻で、尊氏の彫像としては現存最古である。垂れ目の穏やかな面貌が特徴的で、像主の面貌を忠実に写したと推察される。体躯は通例の束帯像と同様に単純化されるが、安定した正面観と、どっしりとした厚みのある側面観に、像主の威厳の表出が意識されている。

構造は細い材を組み合わせたうえで内刳を施し、体幹材正面に像心束を彫り残す。こうした構造は院派仏師の作例によくみられる特徴だが、足利将軍家は院派仏師を重用したことが知られているので、尊氏像の作者に相応しい仏師が選ばれたといえよう。

本像を安置する安国寺（大分県国東市）は、尊氏が全国に建立した同名寺院の一つだが、当初は京都東山の東岩蔵寺に安置されていた。『蔭涼軒日録』文明十九年（一四八七）五月二十五日条によれば、応仁・文明の乱以前は尊氏の遺骨とともに安置されていたが、乱で東岩蔵寺が焼失してしまったので、山科の地蔵寺に移されたという。その地蔵寺も明治期に廃寺となってしまったため、最終的に明治三十九年（一九〇六）に安国寺に譲られ、現在に至る。

南北朝時代において、菊池一族と足利尊氏の対峙は箱根竹ノ下の戦い、多々良浜の戦い、湊川の戦いの三度がよく知られている。いずれも尊氏方の勝利に終わっているが、尊氏自身は菊池一族の戦いぶりをどう見たのであろうか。（萬納）

後醍醐天皇が懐良親王へ与えた御旗

国指定重要文化財

64　金烏（きんう）の御旗（みはた）（八幡大菩薩旗（はちまんだいぼさつき））　一幅

伝後醍醐天皇宸筆
絹本墨書　掛幅装
縦一九一・二　横七二・六
南北朝時代　十四世紀
五条家文書　個人蔵　九州歴史資料館寄託

征西将軍として九州へ下向する懐良親王に対し、後醍醐天皇がみずから書き与えたという旗。懐良親王の側近として随行し、そのまま筑後矢部（現福岡県八女市）に土着した五条頼元の子孫が、長らく守り伝えてきた。十四世紀にさかのぼる軍旗の伝世例はほとんど知られておらず、右記の由緒ともども、たいへん貴重な作品である。

中心に大きく描かれているのは、太陽の中にいるとされたカラス「金烏」。転じて、太陽の異称でもある。本来「金烏」は三本足というが、ここでは二本しか描かれていない。ともあれ、南朝勢を鼓舞する象徴として制作されたのであろう。また、金烏の上部には、天皇家とゆかりが深く、軍神としても信仰を集めた「八幡大菩薩」の神号が揮毫される。

正平三年（一三四八）に肥後へ入り、菊池武光に迎え入れられた懐良親王は、正平年間（一三四六～一三七〇）後半にかけて征西府の全盛期を築いた。そして、その中核となったのは、武光率いる菊池勢であった。彼等は、懐良親王のもとにたなびくこの旗を目の当たりにしながら、武家方との戦いに挑んでいたはずである。

（山田）

当国八城郡内蜂屋近
江守跡事、為恩補充
行者也、早可令領
知状、如件、
長禄四年八月三日　肥後守（花押）
佐藤□□少輔殿

菊池為邦、肥後南部にも影響力

79　菊池為邦宛行状　一通

佐藤□□少輔宛
紙本墨書　竪紙
縦二六・四　横三六・八
室町時代　長禄四年（一四六〇）八月三日付
個人蔵

これまで室町時代における菊池氏の肥後支配は、菊池川流域を中心とする北部に偏っていたと考えられており、南部における事例の少なさは、影響力の不均質性を示す証左と捉えられてきた。ただ、菊池為邦の時代には、肥後南部に関係する文書がいくつか確認され、前後の当主とは異なる様相を呈している。

本文書は、肥後南部に関係する一通。文安三年（一四四六）に家督を継承した菊池為邦が、八代郡内の蜂屋近江守旧領を佐藤某へ付与した宛行状である。これまでの研究ではまったく触れられておらず、恐らく新出文書であろう。

興味深いのは、ここで為邦が八代郡の所領について処分権を行使していること。この翌年に、彼は阿蘇大宮司に八代郡海東郷（現熊本県宇城市）を付与してもいる。つまり、この時期に、為邦は八代郡を（一時的ながら）支配領域に収めていたのである。

その背景には、当地の国衆名和氏の内紛があった。本文書が出された時期は、名和顕忠が一時的に薩摩北部や相良領国へ疎開していたタイミングにあたるのだ。史料的制約により確定しえないが、少なくとも顕忠が八代へ復帰する寛正六年（一四六五）まで、菊池氏の八代郡支配は継続していたとみられる。

（山田）

図録にのみ掲出

筑後をめぐって大友氏と対立した菊池氏当主

熊本県指定重要文化財

80　菊池為邦像　一幅

文英清韓賛
紙本着色　掛幅装
縦九一・五　横三五・二
桃山時代　慶長十二年（一六〇七）着賛
菊池市・菊池神社保管

一郡規模を領有する国衆が割拠する肥後において、室町時代の菊池氏の支配は、必ずしも均質ではなく、強力でもなかったといわれる。しかし、文安三年（一四四六）に家督を継承した菊池為邦の事績をみると、肥後南部の相良長続に当知行地と葦北郡を安堵したり、阿蘇大宮司に八代郡海東郷（現熊本県宇城市）を付与したりしている。肥後においては、守護権限をふるう上位権力者として、国内の秩序形成・維持に固有の役割を担い続けていた。

ただ、菊池氏の衰退が為邦の頃にはじまったのも、また事実なのであろう。それを象徴するのは、寛正六年（一四六五）の筑後守護職の喪失。室町幕府と関係を深めていた大友親繁へ筑後「半国」が付与されたことに不満を持った為邦は、幕府の指示に従わず、大友勢と合戦をはじめ、けっきょく筑後「一円」の守護職を奪われてしまうのだ。この後、菊池氏は大友氏と筑後をめぐって対立を続け、幕府にも働きかけていくが、ふたたび筑後守護職を得ることはできなかった。

さて、この肖像画は、その為邦のすがたを描いたもの。賛者の文英清韓は臨済宗の高僧で、加藤清正により登用され、熊本に六年間滞在したとされる。賛には慶長十二年（一六〇七）の年紀があり、作画もほぼ同じ時期であろう。画面の損傷が激しいが、筆致は正系の狩野派によるものと思われ、清正が熊本城築城の際に京都から呼び寄せたとされる狩野言信（喬信）との関連が想定される。熊本に遺された桃山時代に遡る肖像画として、貴重な作例である。

（山田）

延寿派の刀工か。南関大津山弾正の佩刀という大太刀

熊本県指定重要文化財

85 太刀 元国 一口

元国
刃長 一一四・八 反り三・一
室町時代中期 十五世紀
熊本市・藤崎八旛宮蔵

室町時代の延寿派刀工とみられる「元国」作の太刀で全長は百五十㎝を超える。刃文は広直刃で湾れ交じり、鍛えは板目に杢交じり。茎に銘があり「元国作　大津山弾正資宗」と読める。「資宗」に続いて「帯之」と刻まれているとする解説書もあるが、現状では不明である。

刀工元国は大隅国（現鹿児島県）の刀工で、鎌倉時代後期に活躍したと伝えられるが、作風からみると室町時代の延寿派の刀工と考えられる。銘記に登場する大津山弾正は、南関・大津山城主大津山氏の一族とみられるが事績は不明である。

本作には朱塗糸巻太刀拵が添えられており、刀装金具は赤銅魚子地に桐九曜紋を据えたもの。鐔に銘があり「肥州隈本住藤田新五郎作　寛永拾七年八月日」と記される。本品は寛永十七年（一六四〇）に細川忠利が拵を新作して、太刀とともに藤崎八旛宮に奉納したもので、延寿派の優れた刀としても、江戸時代初期の肥後金工作品としても貴重な作例である。

（有木）

第四章 菊池一族の盛衰と菊池川流域の文化

2 菊池氏の衰退と滅亡

室町時代も後半に入ると、菊池氏権力には衰退の兆しがみえはじめる。寛正六年（一四六五）に失った筑後守護職の回復失敗も、そのひとつ。そして、より大きなきっかけは、菊池能運のもとで起こった内紛と、その後の彼の急死であった。

能運亡き後の菊池氏は、肥後進出を狙う豊後の大友氏の介入もあり、その後継者をめぐって混乱を極めた。玉名郡を拠点とする菊池一族の政隆、阿蘇大宮司の阿蘇惟長（菊池武経）、菊池一族の武包を経て、最終的に家督を継いだのは大友義長の次男重治。菊池義武の名で知られる人物である。

しかし、混乱はそれでも治まらなかった。義武が大友氏に対抗し、筑後侵攻を企てたためである。その結果、逆に大友勢が肥後へ侵攻。天文十二年（一五四三）には、肥後守護職を奪われてしまった。こうして、肥後最大の領主権力としての菊池氏は滅亡した。「再興」を目指す動きもみられたが、叶うことはなかった。

（山田）

熊本最古級の木造仏像

熊本県指定重要文化財

106　木造地蔵菩薩立像　一軀

カヤ材　一本造　彫眼　彩色
像高一〇四・二
平安時代前期　九世紀
山鹿市・康平寺蔵

熊本県下の木彫仏としては最古級と目される仏像。頭部から足元の台座蓮肉までの全身を、カヤとみられる一材から彫出する古様な構造の一木造である。木心は後方に外し、後頭部に節があらわれている。両手首先や表面の彩色は後世に補われたもの。

像高に比べて頭部を大きくつくる短躯な体型と、目、鼻、口を顔の中心に寄せる顔貌表現が特徴的である。頭部には髪の生え際（髪際）を彫刻であらわす。目鼻立ちをはっきりとあらわし、太腿の量感を際立たせるかのようにした衣文は彫りが深く、いずれも平安時代前期の仏像によくみられる表現である。制作時期は遅くとも九世紀後半を下らないだろう。同時代の京都や奈良、大宰府周辺で制作された像と比べても遜色のない優れた作例といえる。

本像が伝来した康平寺は康平年間（一〇五八～一〇六九）の創建と伝えられることからその名があるが、本像の制作時期はそれをはるかに遡る。現在の康平寺からやや離れた真洞浦という地には、かつて真言宗寺院が存在したといい、実際に九世紀ごろの瓦が出土している。あるいは本像はその真言宗寺院ゆかりの仏像かもしれない。

（萬納）